

自己完成への一本道

—孔子の好学—

李 致億

はじめに

これまで学界で、孔子の「学」、または「好学」をテーマとした研究は数多く提出され、様々な議論が行われてきた。それにもかかわらず、私が「好学」をテーマとした理由は今までの研究に不備があるからではない。既存の研究について同意しつつも、孔子の「学」と「好学」について別角度からの解釈を行いたいためである。

儒学の「学」の字は実に重みを持っていると思われる。これは「学びて時に之を習ふ。亦よろこばしからずや」といった『論語』の第一句が持ったインパクトだけではない。「儒学」といった名称そのものからすでに「学」の重みを感じられる。例えば、一般的に諸子百家の思想については「学」の字をつけて呼んではいない。老子と荘子の思想を「道家」とは呼んでも、それを「道学」とはいわない。墨子やその学派を「墨家」とはいつても、「墨学」とは呼ばない。インドから中国へ流入した仏教に対しても、「仏家」という用語はよく使っても、「仏学」といつた用語を使うのは比較的少ない。(だからといって、このような諸子百家と仏教の思想が学問ではないと主張するのではなく、名称に「学」という文字が使われていないことを触れておきたいだけである。)

「学」の重要性が読み取れるもう一つの特徴は、孔子の「志学」にも現れる。孔子は「吾十有五にして学を志す」と言っているが、我々はこの文章について、意味付けや解釈をあまりしない傾向がある。もちろん、孔子が学問を志したのが、それほど特別なのかと問い返されるかもしれないが、もう少し深く考えれば、別の意味を見出すことができる。一般的に「〇〇に志す(志于)」と言ったら、「志于」の目的語に該当するのは、方法または手段ではなく、目的が来るのが自然である。孔子が「朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり」としたほど、道の実現を渴望していたことからみれば、「志于」の後には「道」が来るべきである。実際に『論語』の「志於道」で自ら、

「道に志し、徳に拠り、仁に依り、芸に遊ぶ。」

「士、道に志して、悪衣悪食を恥ずる者は、未だ与に議るに足らず。」

といったのはそれである。また孔子は「志」について次のように言及している。

顔淵、季路侍す。子曰く、盍ぞ各と爾の志を言わざる。子路曰く、願わくは車馬衣裘を、朋友と共にし、之を斲りて憾み無からん。顔淵曰く、願わくは善に伐ること無く、労を施すこと無からん。子路曰く、願わくは子の志を聞かん。子曰く、老者は之を安んじ、朋友は之を信じ、少者は之を懐けん。

孔子が志したといった「老人には安心されるように、友だちには信ぜられるように、若者にはしたわ

れるようになること」は、実現された効能であって、過程や方法ではない。「志す」としたとき、その後ろに過程や方法が来るのは文法的に一致しない。それにも関わらず、孔子が既に「学を志している」と言ったのは、孔子において「学」は単なる「学習」や「学問」といった現代語が持つ意味より、遥かに重要な意味を持っている証拠であるといえるだろう。

孔子にとって学は、現代的意味での勉強や学問に留まらないことは既にこれまでの研究で提起され議論されてきた問題である。したがって、本稿でもこれに対する異議を提起する余地はない。本稿ではこのような今までの議論を踏まえて、孔子における「学」の重みを振り返り、それが「好学」の意味とどのように繋がるのか見て行きたい。その上で孔子の好学が現代の教育にどのような意義を持って適用できるかを模索してみたいと考えている。